

遠藤周作と世田谷 (一)

笛木美佳

Shusaku Endo and Setagaya (1)

Mika Fueki

This paper is the first part of a serial work on the biographical details of Shusaku Endo (1923-1996) whose complete diaries (*Endo Shusaku Zen-Nikki*, in 2 volumes) were published in 2018. The author focuses on the time Endo spent in Setagaya, Tokyo, where he resided for more than 10 years between 1942 and 1958, except for some intervals away from the place. The author discusses the relationship between the novelist and Setagaya.

The author delves into Endo's essays, fictions, recollections by his wife, writings by his teachers and other contemporaries, and looks at the social background to Endo's life such as transportation route maps, and tries to understand what motivated the author to become a writer for life during his days in Setagaya.

The first two sections on "The sense of shame and guilt toward his mother" and "An encounter with Saku Sato" suggest that Endo fled from the pressure he felt from his Christian mother and moved from Kansai to Setagaya where his divorced father lived. There, by chance, he got a book *Outline of French Literature (Furansu Bungaku Sobyō, 1940)* by Saku Sato, who became his mentor. The author concludes that, thanks in part to encounters with Saku Sato and other literary friends, this period in Setagaya was instrumental in Endo's formation. (To be continued.)

Key words: Shusaku Endo (遠藤周作), Setagaya (世田谷), Christianity (キリスト教), Saku Sato (佐藤朔), French literature (フランス文学)

遠藤周作が亡くなってから二十年以上が経った。昨年、平成三十年(二〇一八)五月には『遠藤周作全日記』上巻1950-1961・下巻1962-1993(河出書房新社)が刊行され、遠藤文学研究の基礎資料は整理されつつある。しかしその一方で、遠藤が活躍した昭和はますます遠くなり、事柄によっては、資料をつなぎ合わせてまとめることも難しくなるのではないかと思われる。そこで、遠藤とはゆかりの深い地である世田谷との関係を整理する。

遠藤は、昭和十七年(一九四二)から昭和三十三年(一九五八)まで十年以上、世田谷に居住していた(途中、大学予科時代の白鳩寮入寮、フランス留学の期間は除く)。この期間には、遠藤の人生において、重要なきっかけとなった事柄が多かった。以下、一. 母へのうしろめたさ 二. 佐藤朔との出会い 三. 文学仲間との出会い 四. 歴史小説へのきっかけ 五. 成城大学非常勤講師 六. その他(昭和女子大学との関わり)の六項目を立てつつ、論じていく。

一. 母へのうしろめたさ⁽²⁾

大正十二年(一九二三)に生まれた遠藤は、銀行勤めの父の転勤により、大正十五年・昭和元年(一九二六)から大連で幼少期を過ごしたが、父の心移りにより父母が離婚、昭和八年(一九三三)に母、兄と日本に帰国し、

神戸の伯母（母の姉）の家を経て、西宮市夙川・仁川に住んだ。私立灘中学校に学び、昭和十年（一九三五）十二歳の時、夙川カトリック教会で受洗した。灘中四年終了時の昭和十四年（一九三九）、卒業年の十五年（一九四〇）と続けて三高を受験し、失敗。十六年（一九四一）に広島高校も失敗、同年四月から上智大学予科甲類（ドイツ語クラス）に入学した。しかし、この入学は次に示すように、母の意向が強く働いた不本意なものと、山根道公氏⁽³⁾は推測している。

（前略）ちょうど同じ一九四一年（昭和十六年）度から、仁川での母郁と遠藤の精神的指導司祭になっていたヘルツォグ神父が東京に移り、上智大学の教授になっている事実である。（中略）ヘルツォグ神父は母にとって周作のなるべき理想像になっており、その母郁の思いを察するならば、一浪中の息子が二浪するよりも、ヘルツォグ神父が教授となった上智大学に送り込みたいと願い、ヘルツォグ神父にも相談したであろうことは想像に難くない。／＼影法師⁽⁴⁾では、「僕」と母の指導司祭である神父が寮の指導司祭という新しい仕事をやることになり、母は「僕」にその寮に入る気持はないかと急に言いだし、「僕」は「幾度も厭だ」と言っても「きつい母の性格」で、「僕」は強引にそこに入れられるという話が描かれている。この話は、遠藤が母によって強引に上智予科に入れられた出来事を変形させて語っているのではなからうか。

結局、遠藤は昭和十七年（一九四二）二月、予科一年途中にして退学、仁川に戻る。が、そのまま仁川に居続けたわけではなかった。旧制高校をめぐりて再び受験勉強の後、姫路、浪速、甲南等の高校を受験し失敗。その後、「当時、会社役員であった父の経堂の家（世田谷区経堂町八〇八番）⁽⁴⁾に移⁽⁵⁾」⁽⁴⁾ったが、この状況について山根氏は同じく次のように説明している。

兄正介と相談し、母にこれ以上経済的負担をかけないため、上の学校へ進む学費や生活費は父親から出してもらおうことにしたということがその時の理由であったようである。しかし、それは裏返せば、これからの自分の将来のことを考えて、当時、もはや息苦しい存在となった母から離れて自由になり、会社の重役にまで出世し経済的に豊かな父の方を選んだということであったともいえる。そして母を離れて、キリスト教を嫌っていた父のもとにゆくことは、母と結びつくキリスト教を棄てるということも重なるものであったろうと推察される。

つまり、父の家への転居は、二つの意味を孕んでいた。一つは経済的な問題解決のためである。加藤宗哉氏⁽⁶⁾が、「戦時においても常久の経済状態は一応安定していた。正介の東大入学時には鋼板工業取締役だった常久は、その後、経歴上では安田保善社業務部長、安田興業常務、社長とのぼりつめている。この時期の常久がどの段階にいたにせよ、二人の息子を養うくらはいは簡単な話だった」と記しているとおりであろう。

父の家への転居の今一つの意味は、母の束縛から逃れることである。山根氏⁽⁷⁾は遠藤順子夫人『夫の宿題』⁽⁸⁾のエピソード、

息子が十八歳になった時に「お前はもう息子から離れろ！」と主人に言われました。「十八歳以上の男の子にとって母親とは有害な存在以外の何ものでもない」というのが主人の考え方でした。十八歳以後の息子の教育は父親の出番だと、確信していたようでした。

を引き、「十八歳の青年周作にとって重く強引な母親の情愛と信仰の強要はどんなに息苦しかったか、母親がそれを理解し、距離をおき、自分をも

っ自由にしてくれていたら、あのように決定的に母を裏切り、傷つけて出ていくことにはならなかったのではないかという痛恨の記憶が、この極端な言葉を言わせているのであろうと考えられるのである」と述べている。また久松健一氏も、遠藤の『僕のコーヒーブレイク』遠藤周作対談録⁽⁹⁾の対談「VS山村賢明」から「十代二十代のとき、私は自分の母親に対してうるさいという感情、ベタベタしてくる、邪魔をするという感情しかなかった」を引きつつ、「自我を確立するために、「自分の内界から湧きあがってくる」ものを押し殺す存在である母親。母親が「同じ信仰を強要すればするほど、私は、水に溺れた少年のようにその水圧をはねかえそうともがいた」(『母なるもの』)。溺れないためには、もがかずにすむには、母を切り棄てるほか手だてはなかった」と考察している。両者の述べるとおりであろう。

そうした「切り棄て」はうしろめたさをもたらす。母への裏切りの思い、うしろめたさの意識について、遠藤は『人生の同伴者』⁽¹¹⁾において言及している。聞き手の佐藤泰正が漱石と遠藤の類似性を指摘した際に、遠藤は「漱石は母親にうしろめたさをもっていたか」を尋ね、自分は幼年時代の父母離婚の際、不仲になった両親の「どっちかにつかねばならぬという選択を毎日強いられ」、父と出かけると母親が取り残され、「十歳の子どもにとっては裏切ったという感じ」として記憶されたと語った。さらに続けて「イエスの生涯」等で描いた「聖書のなかで弟子たちがイエスを裏切ってしまう、あのうしろめたさは、いつも自分の心のなかにあったんです。かくれ切支丹ものを書いて、裏切りと母親との関係というものをとおして切支丹をみているんです」と語った。ここで遠藤は幼年時の両親の離婚をめぐる選択を裏切りの体験として挙げたが、十八歳時の(父の家か、母の

家か)の選択もこの延長線上にあったことであろう。

遠藤自身のうしろめたさは、かくれ切支丹(潜伏切支丹)や、イエスを裏切った弟子たちのうしろめたさと結びつき、そうした弱者をもゆるす母なる神を求める信仰、そしてそれを突き詰めていく作品に繋がっていった。三浦朱門⁽¹²⁾「彼の文学作品にあって、裏切りは大きな要素を占めている」、笠井秋生氏⁽¹³⁾「初期作品から『沈黙』に至る遠藤文学に顕著な裏切者、転び者、あるいはその同類への強い関心は、母を二重(引用者注 母の希望通りに入った上智の退学と、母の勧めたキリスト教への不信の二重)に裏切ったという遠藤の自覚と無関係ではない」、山根氏⁽¹⁴⁾「母親は自分にとって、自分を単に包んでくれる存在である以上に、自分が裏切った存在、うしろめたさを感じる存在であるという遠藤の意識は、後の遠藤文学の根源的なモチーフとなるものではない」といえよう、久松氏⁽¹⁵⁾「弱者自身とする遠藤流の自己規定を、文学的、思想的な「弱者の論理」にまで磨きあげさせ、精度を高めた現実の出来事がある。母親郁との葛藤のドラマである。そして、それが遠藤の「秘密」の核心を握り、同時に遠藤文学の核をなすものとなる」と、諸氏が述べているとおりである。

父の家、世田谷区経堂は、遠藤にとって母への裏切り、うしろめたさを味わう地であり、遠藤文学の軸を築いたところでもあった。ちなみに遠藤は「わたしが・棄てた・女」⁽¹⁶⁾の中で、裏切られ、棄てられる女性、森田ミツの最初の居住地を「東京都 世田谷区経堂町八〇八 新藤様方」(『ぼくの手記』(一))に、また裏切った男、吉岡努の就職先を「大手町にある一流製釘会社の品を一手に引き上げている」「日本橋にある釘問屋」(『ぼくの手記』(四))としている。遠藤の父、常久の勤めていた安田興業株式会社(後の安田工業株式会社)は「明治30年(1897)に日本で初めて洋釘を製造

した企業として広くその名を知られてい⁽¹⁷⁾る会社であった。ここでは手近な地名・職業を当てただけかもしれないが、遠藤は連載時の昭和三十八年(一九六三)には既に世田谷を離れているので、何らかのこだわりがあったのではないかと思われる。

二、佐藤朔との出会い

昭和二十年(一九四五)四月、慶應義塾大学仏文科進学の際に出会った恩師佐藤朔は、作家、遠藤周作の人生を決めたと言っても過言ではなからう。

人生などは偶然のどういう機会で、どうなるかわからない。この一冊の先生の本(引用者注 佐藤朔『フランス文学素描』)でほとんどそれまで勉強の嫌いだっただけが廿世紀の仏蘭西カトリック文学に非常な興味を持ったのである。私は学部は仏文科をえらぼうと即座に決心してしまった。(佐藤朔先生のこと)⁽¹⁸⁾

佐藤朔の導きは、仏文科選択の際だけではなかった。

大学を終えて、先生に就職をしたいのですがとお願いすると、先生は言下に「ノンとおっしゃった。君はもの書きになりたいと言っていたじゃないか。就職など必要はない。もの書きになりなさい」それで私の一生は決った。(わが師・佐藤朔先生)⁽¹⁹⁾

さらに、遠藤の絶筆(口述筆記)「佐藤朔先生の思い出」⁽²⁰⁾では、作家になつた後のエピソードとして、芥川賞受賞の報告に行った折のことに触れ、「これからが大変だぞ!」ときびしい言葉を頂いた。以後、私の書くものはくだらぬ雑文までほとんど全部、読んでおられ、お目にかかる度に、いつもきびしいご批判の言葉を頂戴していた」と振り返った。

一方の佐藤朔も、学生時代から遠藤の「もの書き」としての資質を見抜いており、意図的に導いたことを明かしている。

遠藤君に評論や小説が書けそうなことは学生時代から見当がついていた。それほどばかりではなく、探偵小説も、冒険小説も、滑稽小説も、詩も、短歌も、俳句も(漢詩はダメらしいが)なんでもできそうだった。できそうだけでなく、どれもこれもひそかに書いていたのではないかと思われるふしがある。しかし当人はまだどれにも自信がなく卒業後すすむべき道をだぶ迷ったらしい。そのとき第一回のカトリック留學生の話が起つたので、ぼくはなんでもかでもフランスに行くことをすすめた。さもないとかれは映画の監督かラジオのプロデューサー^(ユエーサー)かになりたいと思っていたからである。それもうまくいかなければ漫画家を志したかもしれないのである。あまりに探求心がつよく、可能性が多い人間というのは一歩あやまれば、とんでもない方向に行ってしまうものだ。(「アデンまで」⁽²¹⁾まで)

この恩師との出会いについて、遠藤は上記も含め、いくつもの文章に残している。

- ① 「佐藤先生の弟子」(『藝文研究』23号、昭42(一九六七)・2)
- ② 「佐藤朔先生のこと」(『群像』25-3号、昭45(一九七〇)・3)
- ③ 「私はなぜ小説家になったのか——『神々と神と』から『沈黙』を書くまで——」(『中学教育』12月号、昭46(一九七二)・12)
- ④ 「佐藤朔先生」(原題「あの人、あの頃」佐藤朔先生、「遠藤周作文学全集」7月号4)新潮社、昭50(一九七五)・5、のちに『遠藤周作文学全集』13、平12(二〇〇〇)・5、新潮社に所収)
- ⑤ 「わが師・佐藤朔先生」(『本の窓』昭54(一九七九)・3、のちに『狐狸

庵交遊録』平18（二〇〇六）・9、河出文庫に所収）

⑥ 「私の愛した小説」（原題「宗教と文学の谷間で」『新潮』昭58（一九八三）・10～昭59（一九八四）・11、のちに『遠藤周作文学全集』14、平12（二〇〇〇）・6、新潮社に所収）

⑦ 「私の履歴書」（『日本経済新聞』朝刊 平成元（一九八九）・6・1～6・30、のちに『遠藤周作文学全集』14、平12（二〇〇〇）・6、新潮社に所収）

⑧ 「佐藤朔先生の思い出」（『三田文学』75-46号夏季号、平8（一九九六）・8、のちに『遠藤周作文学全集』13、平12（二〇〇〇）・5、新潮社に所収）

以上のエッセイを総合すると、その出会いは次の様に集約できる。

慶應義塾大学予科二年（②ほか）の昭和十九年（一九四四）、信濃町の白鳩寮に下宿していた（①ほか）遠藤は、一週間のうち三日間は川崎の軍需工場に勤労働員として通っていた（③ほか）が、その帰りにたまたま世田谷区下北沢の古本屋「白樺書店」（⑤）で、佐藤朔『フランス文学素描』（⑤ほか）を見つけ、それが自分の進学する三田（慶應義塾大学本科）の講師の書いた本だと知り購入（⑤ほか）、寮に戻って一晩で読了し、仏文科に進もうと即決した（⑤ほか）。その後、一九四五年の空襲のため、寮は閉鎖され、経堂の父の家に戻り（⑦）、四月から三田の仏文科に進学した（④ほか）。が、佐藤朔の病氣療養のため講義がなく、思いきって手紙を書いて杉並区永福町の佐藤宅を訪問（⑤ほか）、その日からしばしば通い、フランス文学の講義を受けた（③ほか）。

書名が『仏蘭西文学の潮流』（①）、『フランス文学の潮流』（④）、『廿世紀仏文学の潮流』（②③）になっていた（これは『フランス文学素描』の巻

頭章が「潮流」であり、印象が強かったためであろう）、進学した年を昭和二十一年（一九四六）としたり（⑦）の記憶違いもみられるが、内容に大きなずれはない。人生の重要な転機に世田谷区の下北沢が関わっていることがうかがえる。

ところで、この出会いをめぐっては三つの問いが成立する。

第一に、遠藤がなぜ『フランス文学素描』を購入する気になったのかである。何の興味もなければ、古本屋で『フランス文学素描』を手取るはずはあるまい。というのは、遠藤は中途退学した上智大学の予科でも、慶應大学の予科でもドイツ語専攻で、フランス語は勉強しておらず、仏文専攻を意識してから独学で勉強したことをしばしば語っているからである。

①～⑧のエッセイからは、仏文科専攻の起点が『フランス文学素描』であるように受け取れるが、実はそうではなかった。遠藤の署名入り年譜「年譜」⁽²²⁾に「一九四三年四月／慶大文学部予科に入学。仏語を志望したが独語のクラスに入れられた」とある。ドイツ語が第一志望ではなかったのである。それでは当時、フランス文学が流行していたのであろうか。三浦朱門⁽²³⁾は、昭和十六年（一九四一）以降、英米の文学は敵性文学として翻訳がほとんど出なくなり、ソ連の文学は「赤」の文学である故、ほとんど翻訳されなかったことを挙げた上で、遠藤の仏文科進学について、次のように述べている。

結局、もっとも手に入りやすかったのはドイツの文学ということになる。フランスは国がなくなりかけていることもあって、一般的にはもっとも人気がない文学であった。／（中略）親にも世間にも国家からも否定されるフランス、ことに、文学部などは大学の名に値しない、といった風潮すらある戦時中の

日本で、フランス文学を、それも非国民的邪宗みたいにいわれるカトリック信者として勉強する。これは飛び級して一高、東大に進学して、高等文官試験にパスして国家のエリートになる兄、正介とは、正反対の道だからこそ意味がある。兄、正介と反対の道を行ってみようじゃないか、といった愚弟としての意地があったのかもしれない。

優秀な兄に対する「意地」についてはともかくとして、当時の一般的な青年とは異なり、カトリック信者の遠藤には、フランス語・フランス文学に惹かれる素地があったことはうかがえる。

さて素地はあっても、ドイツ語クラスに入り、勤労働員の日々で勉強することもままならぬ状況下にあつて、遠藤をより強くフランス文学に結びつけた二人の人物がいた。白鳩寮舎監の吉満義彦と、彼に紹介されて遠藤が訪問した堀辰雄である。

吉満義彦は「スコラ哲学者。東京大学在学中プロテスタントからカトリックへ改宗、1928〜30年パリに留学しJ・マリタンに師事。上智大学、公教神学校、東京大学などで教え、また聖フィリップ寮（現真生会館）の舎監として青年を指導した」⁽²⁴⁾人物であり、遠藤も寮生としてその教えを受けた一人である。①「佐藤先生の弟子」には、「ちょうどその時（引用者注『フランス文学素描』を古本屋で見つけた時）、私は吉満義彦先生が舎監をされている学生寮に下宿していたからマリタンの名は聞かされていたしその翻訳も幾つかは読んでいた。だが自分ではまだ独文をやるうか哲学をやるうか迷っていたのである」と哲学専攻の可能性にも触れており、その影響の大きさがうかがえる。佐藤朔は「さらに遠藤君に期待する」⁽²⁵⁾の中で、「彼が大学生時代にどうしてフランス文学を専門にしようとしたか本当の」とこ

ろはよくわからないが、早く岩下壮一氏や吉満義彦氏に傾倒して、カトリックの形而上学に相当深入りしていたようであった」と書き、また山根氏も「吉満義彦体験——その影響と超克」⁽²⁶⁾の中で、「フランスのカトリック文学研究に進む契機について、一九四四年に佐藤朔の『フランス文学素描』を古本屋で見つけて読んだのが切っ掛けであると遠藤は語っているが、実際はその前に吉満の影響でカトリック文学を読み始めている」と論じているとおり、吉満は遠藤をカトリック文学に誘った。遠藤自身も「対談 遠藤周作 佐古純一郎 吉満義彦との出会い」⁽²⁷⁾の中で、「僕は仏文に行こう、ということを先生（引用者注 吉満先生）に申し上げたことがある。フランス語をやりたいと。先生はフランス語が出来て小説書く人がいないかってお考えになったんじゃないでしょうか。だとすると堀さんだと。それから僕は詩みたいなまねごとをちょっと書いたりしていたから、堀さんが詩人だから、そういう意味で堀さんを紹介してあげようっておっしゃって下さった」と書いている。吉満と堀との関係については、山根氏の「吉満は堀辰雄とは一高の一年後輩でその頃からの知人であり、堀辰雄に愛されていた四季派の詩人野村英夫が一九四三年に吉満を代父として受洗していたことも同じカトリックの青年遠藤に堀を紹介した理由の一つだろう」との調査もある。そうした経緯で、遠藤は吉満の部屋に呼ばれ、「君は哲学なんかより文学がむいている。私の知っている文学者で会いたい人がいたら紹介状を書いてあげよう」と言つて、「堀辰雄氏と亀井勝一郎氏に紹介状をすぐ書いてくださった」⁽²⁸⁾（吉満先生のこと）、その紹介状を持って堀辰雄を訪ねたのが、昭和十九年（一九四四）の二月末から三月初め頃であった⁽³⁰⁾。吉満は、遠藤に文学の道を行くことを勧めたのみならず、フランス語・フランス文学への橋渡しをしたのである。

次に堀辰雄の影響について確認する。遠藤の⑥「私の愛した小説」には、遠藤が堀を通してフランス文学、特にモーリヤックに傾倒していくさまが綴られている。

ある日、東京に戻ろうとした学生の私に堀氏が「曠野」という新著をくださった。生れてはじめて小説家からサイン入りの著書もらったので感激のあまり体が震えるようで、確氷峠をくだる汽車のなかでむさぼるように読んだ。／なぜそのようなことを急に書いたかという、あの日、あの汽車の中で私ははじめてモーリヤックの名やその小説論の一節をこの随筆によって知ったからである。そしてそのモーリヤックがともかくもその後小説家になった私に大きな影響を与えたからでもある。／(中略)／ともあれ、堀氏の随筆を通してモーリヤックの名を知った私はこの作家がカトリック作家であるから、わが身に引きつけて勉強してみようという殊勝な気持になった。その上、幸運だったのは、たまたま下北沢の古本屋でみつけた「フランス文学素描」という本にこのモーリヤックのことが二章にわたって書かれていたのみならず、著者の佐藤朔という仏文学者が私これから勉強するであろう三田の文学部の講師だと知ったことである。

『フランス文学素描』(昭15(一九四〇)・11、青光社)の目次を確認すると、「潮流」「小説家」「詩人」の三項目に分かれ、「潮流」には「新カトリック文学運動」「カトリック文学の位置」などの論文が並び、また「小説家」には「モオリアックの場合」などが並んでいる。遠藤の目を十分引きつける書物であったろう。

以上、遠藤はカトリック信者でありフランス文学に惹かれる素地を持っていたところに、吉満との出会い、さらに吉満に紹介されての堀との出会

いを通してフランス文学に強い関心を抱いたが故に、佐藤朔『フランス文学素描』をすぐに手に取ったのではないかと考えられる。⁽³¹⁾

ここに第二の問いが生じる。⑤「わが師・佐藤朔先生」に『フランス文学素描』という本をばらばらとめくり、そして、その著者紹介の小さな活字を見てやがて進学する三田の講師の著作だと知ると、私はすぐそれを買いた」と書かれているように、遠藤は『フランス文学素描』を手にとって、初めて佐藤朔が三田の講師だと知ったとしているが、既に久松氏⁽³²⁾が指摘しているとおり、「紺色の表紙」の初版本のどこにも佐藤朔が慶應義塾で教師をしているという記載が見つからない。私も世田谷文学館蔵『フランス文学素描』(昭15(一九四〇)・11、青光社)を確認したが、まず「著者紹介」がない。紺色のカバー表紙に印刷されているのは、「佐藤朔」『フランス文学素描』「青光社」のみ、カバー裏表紙は「KYO」のみである。カバー見返しには前後とも何の記載もない。「奥付」「あとがき」にも「著者紹介」はなく、慶應義塾大学の文字も見られない。『フランス文学素描』は論文集であるから、論文初出一覧があれば、慶應大学関係の雑誌が記載されたかもしれないが、それも無い。所収されている論文本文にも、慶應大学の名は記されていない。遠藤は①「佐藤先生の弟子」で「あれから二十年、今でも私の書架にはこの本がある。開くとその中に沢山の書きこみがある。先生の御署名もあるが、もちろんこれは仏文科に進学してから先生におねだりして書いて頂いたものだ」と書いている。その蔵書を調べれば何らかの書き込みがあるかもしれないのだが、長崎市立遠藤周作文学館、町田市民文学館ことばらんど、いずれの蔵書目録にも『フランス文学素描』はないので確認ができない。⁽³³⁾

それでは、遠藤はどのようにして佐藤朔が慶應大学の講師だと知ったの

であろうか。これについては、佐藤朔が「アデンまで」⁽³⁴⁾に遠藤が「ぼくの家に遊びにくるようになったのは堀辰雄君の紹介によって」と書いているところから推測すると、堀から時を前後して聞いていた可能性が高い。

佐藤朔と堀辰雄は旧知の、しかもかなり親しい関係にあった。まず、二人は共通する同人誌に参加していた。昭和三年（一九二八）九月創刊の「詩と詩論」は昭和四年（一九二九）九月刊の第五冊から同人制を廃止し、寄稿家組織を取るが、この寄稿家として加えられた九人のうちの二人が佐藤朔と堀辰雄であった。また、昭和七年（一九三二）十一月創刊の「リベルテ」にも同人として二人は名を連ねている。⁽³⁵⁾さらに、佐藤朔「堀辰雄——堀辰雄と軽井沢」⁽³⁶⁾には、昭和七年（一九三二）の夏に旧軽井沢のつるやに逗留していたときのエピソードとして「中仙道に面した角の部屋に堀君が泊っており、私の部屋はその隣りであった。ときどきお互に襖越しに声を掛けて話し合ったり、散歩に誘い合ったりした」と回想しているほか、昭和十年（一九三五）ごろ堀・神西清・織田正信・伊藤織雄と佐藤朔の五人でローレンス・スターンの『トリストラム・シャンドイの生活と意見』の講読会をつづけた時のエピソードも紹介されている。堀の妻、多恵子の『堀辰雄の周辺』⁽³⁷⁾にも、佐藤朔が阿比留信（本名、豊田泉太郎）を堀に紹介したことを「辰雄が豊田さんを知ったのは、丸岡（明）さんの紹介とばかり私は思っていたが、豊田さんの記憶では佐藤朔さんによるそうで、「堀君は君のことをフランスのシュルレアリストの詩人アンドレ・ブルトンに似ているねと言っていたよ」と佐藤朔さんが話されたことを、笑いながら私に聞かせてくれた。それは昭和四年頃の話のようだ」と書かれている。つまり、遠藤が堀から佐藤朔に紹介された昭和二十年（一九四五）より

はるか前から二人には交友関係があったのである。したがって、互いの文章の中で、互いの研究や作家活動について触れることもあった。佐藤朔『フランス文学素描』に所収された「小説における自由」（初出「新潮」通巻42号、昭15（一九四〇）・3）では、冒頭、「最近堀辰雄君が次の小説を書くにあたっての覚書として、出来るだけ小説らしい小説を、同君の「物語の女」のなかにでてくる菜穂子といふ若い娘を主人公として書くつもりだといふことを発表してゐる」と紹介した後、堀作品と関係の深いモーリヤック「テレエズ・デケルウ」を論じた。一方、堀辰雄『曠野』に所収された「狐の手套」四（初出題「狐の手套」「セルバン」昭8（一九三三）・5）は、「自殺に就いてのテスト氏の意見」と題した堀自身の覚書についての文章であるが、「これは数年前に佐藤朔君から借りた『LA REVOLUTION SURREALISTE』の一冊からの抜粋なのである」とし、それについて論じた後で、「以上のところで僕の抄は終つてゐる。これからもつとあとがあつたのやら、ないのやら、僕はもうすつかり忘れてしまつてゐる。佐藤朔君にでも今度会つたら、それを調べて置いて貰はう」と閉じている。既に引用したとおり、『フランス文学素描』も『曠野』も、どちらも遠藤が手に取り、感銘を受けた書物である。その二冊の書物には二人の名前が響き合うように登場していたのである。遠藤にとって『フランス文学素描』は、その中に自身が敬愛する堀辰雄の名前が記されている、信用に足る書物であり、佐藤朔のことを訪ねるきっかけを有した書物であったと言える。さて、『フランス文学素描』を巡る第三の問いは、「偶然」「たまたま」の意味である。

先に挙げた遠藤の佐藤朔との出会いを記した①⑧のエッセイを子細に見比べると、『フランス文学素描』を見つけたときの「たまたま」の掛か

り具合に異なるものがある。A「たまたま本を見つけた」と、B「たまたま下北沢の古本屋に行った」の二つである。

Aの例

佐藤先生の名を知ったのは偶然だった。勤労働員でくたびれたある日、私は下北沢の白樺書店という古本屋でたまたま一冊の本をみつけた。当時の古本屋には読みたいような書物はほとんど姿を消して、駄本ばかりが棚に並べられていたものだが、その一冊の本が偶然あったということが私のそれから大きな影響を与えるとは、その時は夢にも考えなかったのである。(5)「わが師・佐藤朔先生」、傍線引用者、以下同じ)

Bの例

(前略) たまたま下北沢の古本屋を覗いた時、紺色の表紙の本をみつけた。本には三田の仏文科の講師で佐藤朔という名が書いてあった。／自分の進む三田文科の先生だという理由で私はその本を買い、その夜、寝床のなかで頁をめくった。(7)「私の履歴書」

Bのスタンスで書かれているものとして、ほかに「たまたま立寄った下北沢の古本屋で『フランス文学素描』という本を見つけた」(8)「佐藤朔先生の思い出」がある。

また、A・Bどちらにも読めるものもある。「ブルーの表紙カバーのなかったその本を私は偶然、下北沢の古本屋でみつけた」(1)「佐藤先生の弟子」、偶然下北沢の古本屋で買った『フランス文学の潮流』という一冊の先生の本」(4)「佐藤朔先生」、「たまたま下北沢の古本屋でみつけた」『フランス文学素描』という本」(6)「私の愛した小説」、「私が先生の授業を受

けたいと思ったのは全く偶然による」(2)「佐藤朔先生のこと」、「私が先生の授業を受けたいと思ったのは、全く偶然からのことであった」(3)「私はなぜ小説家になったのか——『神々と神と』から『沈黙』を書くまで——」、である。以下、下北沢の位置を考慮しつつ、検証を試みる。

〈白樺書店〉で『フランス文学素描』を見つけた時、遠藤は慶應大学の予科二年で、信濃町の白鳩寮に下宿していた。白鳩寮のあった信濃町は省線中央線の駅であり、勤労働員に通った川崎は省線東北・京浜線の駅である。もし、仕事を終え、川崎から信濃町に帰るのであれば、【川崎(省線東北・京浜線) ↓品川(省線山手線) ↓代々木(省線中央線) ↓信濃町】と乗り継ぐのが普通であろう。『時刻表復刻版 戦前・戦中編6 1944(昭和19)年12月 時刻表5号(通巻25号)』⁽³⁸⁾によれば、乗車時間のみで約三十分である。この経路では、渋谷は通るが、下北沢は通らない。遠藤は「古本の話」⁽³⁹⁾で、「渋谷の宮益坂から青山にかけての古本屋が戦災のためにほとんどなくなってしまったのは、私にとって全く残念である。／私がこの宮益坂の本屋をよくうろついたのは、戦争の最中だった。そのころまだ黄嘴の一書生であり、戦争中のことゆえ勤労働員で工場に行かされていた時だった」と、また「本不足の時代の悦び」⁽⁴⁰⁾にも「私が初めて本とつきあい出した頃——こう書いた途端、すぐ眼にうかぶのは、戦争中の渋谷宮益坂から青山都電通りにかけての寂莫とした風景である。(中略)／なぜそういう通りの風景が眼にうかぶかというと、当時、日吉の慶応予科に入ったばかりの私は毎日の授業や勤労働奉仕の帰り、この宮益坂に残っている古本屋を一軒一軒みてまわって、今日は何か掘り出しものはないかと歩いたからだった」と記している。遠藤が渋谷を通るルートを使っていたこと、その渋谷で日頃、古本屋巡りをしていたことがうかがえる。

では、下北沢に寄って帰るにはどのようなルートを通ったのだろうか。おそらく【川崎（省線 東北・京浜線）↓品川（省線 山手線）↓渋谷（東京急行電鉄 井ノ頭線）↓下北沢（東京急行電鉄 小田原線）↓新宿（省線 中央線）↓信濃町】ではないだろうか。これは乗車時間だけで約一時間であり、乗車時間だけでも川崎―信濃町間のおおよそ倍の時間がかかる。勤労動員は疲労を伴った。⑤「わが師・佐藤朔先生」に「勤労動員でくたびれたある日」と記し、また「吉満先生のこと」⁽⁴¹⁾では、吉満が寮生に「神秘主義」についてのレクチャーをはじめたことに触れ、「おぼえているのはそれを聞いている我々が昼間の工場作業でのつかれのため、懸命に睡魔と戦ったことぐらいである」と書いている。そのような状況で、遠藤が下北沢の古本屋に足繁く通うことはなかったであろう。したがって、下北沢の〈白樺書店〉に立ち寄ったのは、「わざわざ」に近い「たまたま」であり、「偶然」であったと言えよう。以上、佐藤朔の『フランス文学素描』との出会いには二つの偶然があったのである。一つは「たまたま」下北沢の古本屋に立ち寄ったこと、いま一つは「たまたま」書棚に『フランス文学素描』があったことであった。

では、なぜ遠藤は〈白樺書店〉に立ち寄ったのか。その経緯について、遠藤は書き記していない。そもそも、〈白樺書店〉は存在しない。おそらく〈白樺書院〉（世田谷区北沢三丁目九五番地。現、世田谷区北沢三丁目二十一番地⁽⁴²⁾）の記憶違いであろう。ただし、〈白樺書院〉は平成二十八年（二〇一六）十二月に閉店し、現在は〈古書明日〉が後を継いでいる。当時の様子や遠藤との関わり等、何かご存じであればと思ひ、〈白樺書院〉の店主に手紙で問い合わせたが、ご返信はなく、遠藤が立ち寄った理由を突き止めることはできなかった。

遠藤は②「佐藤朔先生のこと」で『フランス文学素描』との出会いを「人生などは偶然のどういう機会か、どうなるかわからない」と書き、後に三浦朱門に「おれな、佐藤朔先生に会わなんたら、本気で仏文なんかやらなかったかもしれないわ。佐藤先生におうて、オレの人生の方向が見えてきたんや⁽⁴³⁾」と語ったという。フランス文学への誘いは『フランス文学素描』以外にも、複数の機会があった。しかし、順子夫人が「主人を文学の道に導いてくださった決定的な恩人は、慶応の佐藤朔先生だったと思うのです。あの方がいらっしやらなかったら、主人はたぶんフランス文学を勉強しなかったでしょうし、小説家になつていたかどうかとも疑わしいような気がします」と語ったように、『フランス文学素描』をきっかけとして、佐藤朔を恩師として選び、その佐藤朔から「もの書き」として生きていくことを強く勧められたことが、人生の重要な転機であったことは間違いないであろう。

なお、佐藤朔の講義を求めて慶應大学仏文科に進学したのに、佐藤が病気療養中で休講だったため、先に引用したように「堀辰雄君の紹介によって⁽⁴⁵⁾」、遠藤は佐藤朔に手紙を出し、杉並区の永福町の佐藤宅に⁽⁴⁶⁾「二週に一度」②「佐藤朔先生のこと」、⑧「佐藤朔先生の思い出」、もしくは「一週間に一度」③「私はなぜ小説家になったのか」、④「佐藤朔先生」、⑤「わが師・佐藤朔先生」と、かなりの頻度で通い続けた。この頃の遠藤の居住地は父の家、世田谷区経堂町八〇八番で、永福町までは、【経堂（東京急行電鉄 小田原線）↓下北沢（東京急行電鉄 井ノ頭線）↓永福町】で乗車時間が二十分ほどであった。②「佐藤朔先生のこと」には、「当時の佐藤先生のお宅は駅をおりてから、かなり長い道を歩かねばならなかった。右も左も焼けあとで、その焼けあとをいつまでも歩いていけると途中で一本の大きな樹があり、

この樹のところでは一寸、休憩をすることにしていた」とある。④「佐藤朔先生」にはその距離を「永福町の駅をおりて焼野ヶ原を突きり十五分ほど歩いたところ」と書いている。佐藤朔の講義を聴きたい熱意もさることながら、体の弱かった遠藤にとっては佐藤宅が比較的近かったことも、恩師との距離を縮める要因の一つとして機能したのではないか。ここにも世田谷が大きく関わっていたのである。

注

- (1) 一般財団法人真生会館のホームページ「沿革」(<http://www.catholic-shin-seikaikan.or.jp/history>) には「1934年2月 財団法人聖フキリッポ寮設立／学生宿舍フキリッポ寮を建設し、岩下神父のカトリック講座始まる」[1945年2月 強制疎開のため寮建物取り壊される]「1946年10月仮小屋建設、白鳩寮と称す」とある。遠藤が入寮していたのは、一九四五年の建物取り壊し前までであるから、「フキリッポ寮」とすべきところであるが、遠藤自身が「対談 遠藤周作 佐古純一郎 吉満義彦との出会い」(『近代日本キリスト教文学全集』11 月報12) 昭53(一九七八)・10、教文館)の中で、佐古に「今、四谷に真生会館というのがありますね、あれの前身が……」と問われて、「ええ、白鳩寮っていうんです。鳩というのは、聖霊を象徴しているんです。白鳩寮っていう学生寮ですね」と答えていることから、本稿では「白鳩寮」を用いる。
- (2) この項目については研究が進んでおり、次の諸氏の論考に拠るところが大きい。

- ・山根道公『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』(平17(二〇〇五)・3、朝文社)
- ・加藤宗哉『遠藤周作』(平18(二〇〇六)・10、慶應義塾大学出版会)
- ・久松健一『原稿の下に隠されしもの 遠藤周作から寺山修司まで』(平

29(二〇一七)・7、笠間書院)

- (3) (2) 参照。
- (4) 山根道公「遠藤周作年譜・著作目録」(『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』平17(二〇〇五)・3、朝文社)。なお世田谷区経堂町八〇八番は現、世田谷区経堂五丁目二十四番地(『東京都大阪府全住宅精密図帳官庁地図(東京都大阪府氏名入精密地図) 縮版』昭38(一九六三)・7、住宅協会地図部、および世田谷区ホームページ「地番と住居表示実施前の住所(旧住所)」city.setagaya.lg.jp/mokujishi/sumai/002/004/d00009592.html内「旧住所から新住所へ検索対照表」に拠る)。
- (5) (2) 参照。
- (6) (2) 参照。
- (7) (2) 参照。
- (8) 平10(一九九八)・7、P H P 研究所。
- (9) (2) 参照。
- (10) 昭56(一九八一)・12、主婦の友社。
- (11) 平3(一九九二)・11、春秋社、のちに平7(一九九五)・4、新潮文庫として刊行。
- (12) 『わが友 遠藤周作 ある日本のキリスト教徒の生涯』(平9(一九九七)・12、P H P 研究所)。
- (13) 「文学とキリスト教——遠藤周作をめぐる」(『キリスト教文学研究』20号、平15(二〇〇三)・5)。
- (14) (2) 参照。
- (15) (2) 参照。
- (16) 「主婦の友」(昭38(一九六三)・1)と2、のちに『遠藤周作文学全集』5、平11(一九九九)・9、新潮社に所収)。
- (17) 「会社概要」(安田工業株式会社ホームページ <http://www.ytd-kk.co.jp/>

- kaisya.html)。なお、同ホームページ「安田工業の歴史」中の「安田工業 TOPICS」には、「安田工業50周年を迎えた時の社長遠藤常久は、作家遠藤周作氏の父親だったのです」と紹介されている。創業は明治三十年（一八九七）であるから、昭和二十二年（一九四七）のことである。
- (18) 「群像」(25-3号、昭45(一九七〇)・3)。
- (19) 「本の窓」(昭54(一九七九)・3、のちに『狐狸庵交遊録』平18(二〇〇六)・9、河出文庫に所収)。
- (20) 「三田文学」(75-46号、夏季号、平8(一九九六)・8、のちに『遠藤周作文学全集』13、平17(二〇〇五)・5、新潮社に所収)。
- (21) 「面白半分」一月臨時増刊号(16-2号、昭55(一九八〇)・1)。
- (22) 『新鋭文学叢書』6 遠藤周作集(昭35(一九六〇)・8、筑摩書房)。
- (23) (12) に同じ。
- (24) 『ブリタニカ国際大百科事典』6(平5(一九九三)・3第2版改訂、ティビーエス・ブリタニカ)。
- (25) 『遠藤周作文学全集』6 月報1(昭50(一九七五)・2、新潮社)。
- (26) 『遠藤周作——挑発する作家』(平20(二〇〇八)・10、至文堂)。
- (27) (1) 参照。
- (28) 山根道公「吉満義彦体験——その影響と超克」(26) に同じ。
- (29) 原題「あの人、あの頃1 吉満先生のこと」(『遠藤周作文学全集』6 月報1(昭50(一九七五)・2、新潮社、のちに『遠藤周作文学全集』13、平12(二〇〇〇)・5、新潮社に所収)。
- (30) (4) に同じ。なお、堀辰雄から遠藤に宛てた面会日を伝えるはがき(昭和十九年(一九四四)二月二十五日消印、長崎市遠藤周作文学館蔵)は『遠藤周作とPaul Endo母なるものへの旅』(平19(二〇〇七)・9、町田市民文学館ことばらんど)ほかに掲載されている。
- (31) なお、モーリヤックを知ったのは、実際は『曠野』を読む以前であること
- を、福田耕介氏が「遠藤周作とフランソワ・モーリヤック——堀辰雄『曠野』をめぐる神話」(Ihla candida) 43号、平25(二〇一三)・3)で検証している。
- (32) (2) 参照。
- (33) 遠藤旧蔵書について本年一月から八月にかけ問い合わせたところ、長崎市遠藤周作文学館、町田市民文学館ことばらんど、世田谷文学館、いずれも所蔵しておらず、町田、世田谷の蔵書はそれぞれの館で購入したものとのことであった。
- (34) (21) に同じ。
- (35) 『堀辰雄事典』(平13(二〇〇一)・11、勉誠出版)。
- (36) 『堀辰雄全集』3 月報3(昭52(一九七七)・11、筑摩書房、のちに、佐藤朔『評論集 超自然と詩——フランス文学と日本文学』(昭56(一九八一)・10、思想社に所収)。
- (37) 平8(一九九六)・2、角川書店。
- (38) 平11(一九九九)・12、JTB。
- (39) 「内外タイムス」(昭35(一九六〇)・8・12、のちに『狐狸庵読書術』平19(二〇〇七)・6、河出文庫に所収)。
- (40) 「週刊読書人」(昭40(一九六五)・9・20号、のちに『狐狸庵読書術』平19(二〇〇七)・6・20、河出文庫に所収)。
- (41) (29) に同じ。
- (42) 世田谷区ホームページ「旧住所から新住所へ検索対照表」。(4) 参照。
- (43) (12) に同じ。
- (44) 『夫・遠藤周作を語る』(聞き手 鈴木秀子 平12(二〇〇〇)・9、文春文庫)
- (45) 佐藤朔「アデンまで」(21) に同じ。なお、『遠藤周作展』(世田谷文学館、平10(一九九八)・4)には「堀辰雄の紹介状をもって」と説明されている。

(46) 日本文藝家協會版『文藝年鑑』昭和二十三年度版(昭23(一九四八)・9、桃蹊書房、のちに昭61(一九八六)・4覆刻発行、日本図書センター)に拠ると、「杉並区大宮前一ノ六ノ五五」で、最寄り駅は東京急行電鉄永福町。『遠藤周作とPaul Endo 母なるものへの旅』(平19(二〇〇七)・9、町田市民文学館ことばらんど)には、永福町駅から佐藤宅までの道順を示した、佐藤朔の遠藤周作宛はがき(昭20(一九四五)・11・9付 長崎市遠藤周作文学館蔵)が掲載されている。なお、そのはがきには〈帝都線〉と書かれているが、昭和八年(一九三三)の井の頭線開通当初は〈帝都電鉄株式会社〉であった。これは昭和十五年(一九四〇)小田原急行鉄道と合併、昭和十七年(一九四二)にはさらに他社と合併し、東京急行電鉄となった(京王電鉄ホームページ「京王電鉄50年史」https://www.keio.co.jp/company/corporate/summary/history/history_01.html)。

*便宜上、すべての引用文献について旧字体は新字体に改め(ただし固有名詞は除く)、ルビは省略した。

*ホームページの最終アクセス日は二〇一九年五月五日である。

*佐藤朔『フランス文学素描』の詳細を調査するにあたっては、世田谷文学館のお世話になった。ここに記して感謝申し上げる。

(ふえき みか 日本語日本文学科)